

## 高校総合学科の魅力の再構築

### － 学習者の視点に基づいたカリキュラム再考 －

学校力開発分野(17220919) 松村将人

国が平成6(1994)年度に高等学校に創設した総合学科による学びは、地域を素材としているほど主体的に学習し満足度も高いこと、一方で、科目選択後の変更ができないという不満がアンケートから明らかになった。 Semester制による科目選択し直しの可能性を考え、「進路が明確な者」も「ゆっくり成長したい者」も総合学科で学ぶ意義を実感し、満足して卒業できる仕組みを考察した。

[キーワード] 総合学科, キャリア教育, 主体性, 地域連携, Semester制

#### 1 問題の所在と目的

##### (1) 問題の所在

国が平成6(1994)年度に高等学校に創設した総合学科は、文部科学省(1993)によると、必要としている教育上の特色として2点挙げられている。第1に「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視する」こと、第2に「生徒の個性を生かした主体的な学習を通じて、学ぶことの楽しさや達成感を体験させる学習を可能にする」ことである。また、総合学科を新たに設ける意義として、1つ目は「単位制や、学校外の学習成果の単位認定等に係る諸制度を大胆に活用するなど、思い切った教育課程の弾力化を容易にすることが期待できる」こと。2つ目に「多様な入学者選抜や、履修科目の自由な選択を通して、能力・適性等の多面的な評価が行われることにより、いわゆる偏差値を尺度とする高等学校間の序列意識を打破する契機となることを期待できる」こと。3つ目に「様々な分野の基礎・基本の学習に適切な科目が多数開設され、地域の人々の要望を踏まえつつ生涯学習機関としての役割を果たすことが期待できる」ことを挙げている。25年が経過した今、多くの成果と課題が指摘されている。二井(2009)の調査では、「自己の個性について理解を深め、伸ばそうとする意欲を持つことができる」という項目について、肯定的意見を持つ生徒は、平成11年調査の66.7%から平成19年には72.6%に増加しているとのことである。一方、中央教育審議会(1991)の中で「形式的な平等」ではなく「実質

的な平等」を実現するための具体策として挙げた「選択の幅を広げ、移動をもっと自由にし、コースの取り換えの可能性を拡大し、寄り道してゆっくり成長するものにはその自由を与える。(以下略)」という点に関してはどうか。勤務校における筆者の経験から、選択の自由は多くの場合1年次であり、一度選択したら原則変更がきかない。これでは、在学中の学びが深まり、自己の進路の自覚が生まれるほど、選択がデメリットに作用する。また、3年生になってまさに就職試験に向かおうという時期になって「履歴書が書けない」「自分の長所がどういうところなのかと言えない」といった生徒が少なからず存在し、「成長」という観点からも問題がある。東京女子体育大学(2012)の調査によれば、『科目選択の仕方がわかりにくい』～(中略)～といった科目選択の時期や方法に関する問題、『取りたい科目が抽選で取れなかった』～(中略)～といった科目選択の運用面の問題、『先生が理解してなさすぎ～(中略)～』といった教員側の問題を指摘している回答も散見される」と指摘している。これらを裏付けるものとして二井(2009)の調査結果によると、「総合学科について不満足な点」に関して生徒が回答した結果、「進路について考える時間をもっと必要(27.1%)」とある。高校3年間を通して、自己を見つめ、じっくり職業について考えることができるよう、学習者の視点からカリキュラムを手直しする必要がある。

##### (2) 目的

学習者がどんなことに満足・不満足を持って

いるのか、カリキュラムが有効に働いているのかを勤務校の卒業生及び在校生のアンケートを分析して検証し、何が生徒にとって満足のか、どの高校での学びにつながるのかを明らかにする。また、どんな仕組みが生徒の主体性を喚起し、生徒の資質能力を育てるのか、生徒がそれらを実感できるようになるかを考察することを本研究の目的とする。

## 2 方法

後述する3つの方法を用いて研究を行う。第1は、平成25年度から平成29年度までにT高等学校総合学科を卒業した卒業生561名へ、総合学科の今後の在り方を調査する目的で行う「学校評価」と題してのアンケート調査である。アンケート項目として、二井(2009)の調査項目を参考とした。第2に、平成30年度3年次生110名への「在校生アンケート」である。現在進行形で学んでいる在校生と卒業生で捉え方の違いや経過年数による違いが無いかを明らかにする。第3に、卒業生インタビューである。アンケートではなかなか記述しきれない当時の困り感を聞き取り、どのように改善すればよいかなどを議論してもらう。

## 3 研究1(卒業生アンケート)

### (1) 目的

卒業後、総合学科での3年間の学びを在学時どう受け止めていたのか、どんな学習や体験が現在役に立っているのかを学習者の視点で探り、総合学科の学びとして何を必要としていたのかを明らかにすることを目的とする。

### (2) 方法

#### ① 調査対象および手続き

県立T高等学校総合学科の卒業生561名に調査票を

		卒業年度					合計
		29年度	28年度	27年度	26年度	25年度	
郵送した。	町外 女	13	21	21	21	6	82
	男	7	1	5	5	6	24
回答用紙は、同封した封筒に入れて返送して	町内 女	9	15	9	10	6	49
	男	12	6	3	2	4	27
	合計	21	21	12	12	10	76
	合計 女	22	36	30	31	12	131
	男	19	7	8	7	10	51
	合計	41	43	38	38	22	182

もらった。調査期間は、平成30年8月10日から開始し9月18日を投函の期限とした。郵送した561名のうち内、187名の回答を得た(回

収率 33.3%)。卒業年度別に居住地や性別ごとの人数を表1に示した。

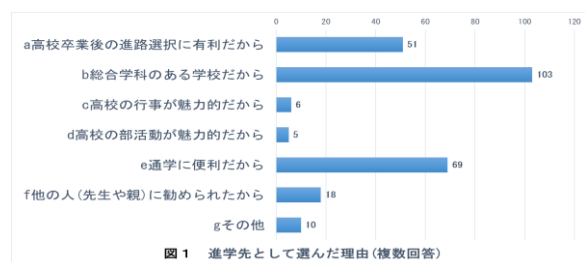
### ② 調査内容

a. 対象者属性 性別, 居住地(学校設置町内か町外), 在学中部活動

b. 卒業時に関すること 卒業時期, 卒業時の進路

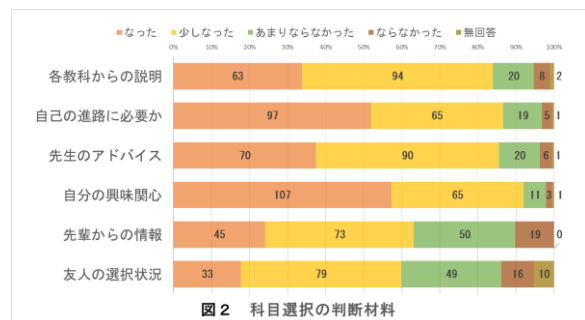
c. 現在の状況 卒業後の進路と現在の状況に変化があるかどうか, 進学先を卒業後, どこに就業したか等を選択形式で回答を求めた。選択項目に該当しない場合を考え, 記述欄も設けた。

d. 対象校を進学先として選んだ理由 図1に示す6項目について, 複数選択で回答を求めた。



e. 総合学科高校理解度 十分理解していた(4点), ある程度は理解していた(3点), あまり理解していなかった(2点), 全く理解していなかった(1点)の4件法で回答を求めた。(以下点数は同じ)

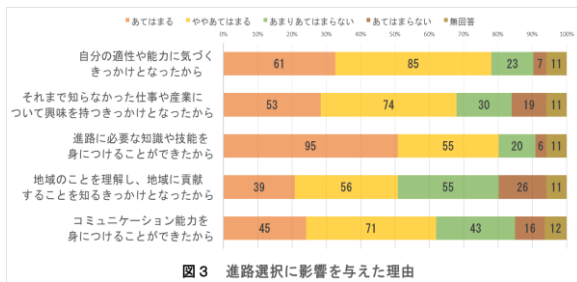
f. 科目選択時の判断材料 図2に示した6項目それぞれについて, 4件法で回答を求めた。その他として記述欄も設けた。



g. 自己の進路選択に直接影響を与えたと思われる教科 共通教科に加えて「総合的な学習の時間」や「産業社会と人間」を加えた15の教科から, 複数選択形式で回答を求めた。特に影響が大きかったものについて科目名を記述形式で求めた。

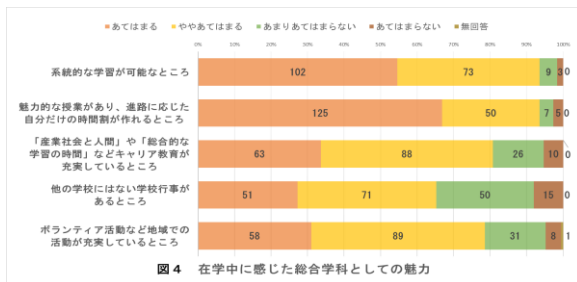
h. 進路選択に影響を与えた理由 gで選んだ教科科目から一つ選び, 図3に示した5項目について, 影響を与えた理由を4件法で回答を求

めた。

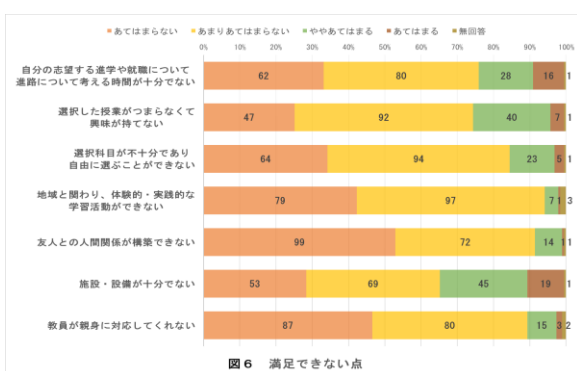
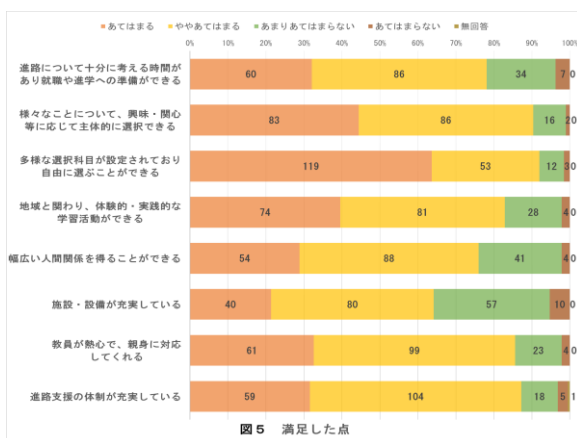


i. 印象に残っている活動と理由 体験的・実践的な授業の中で最も印象に残った授業を、「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」も含めて、理由を合わせた自由記述形式で回答を求めた。

j. 在学中に感じた総合学科としての魅力 図4に示した5項目について、4件法で回答を求めた。



k. 満足した点 対象校で満足したことについて、図5に示した8項目のそれぞれに4件法で回答を求めた。



1. 満足できない点 対象校で満足できない点について、図6に示した7項目のそれぞれに4件法で回答を求めた。

(3) 結果と考察 1

① 居住地と進学先選択理由及び総合学科理解度について

町外から来る人は総合学科であることを理由に挙げる者が多く、対して町内の人は通学の便利さを挙げる者が多かった(表2)。

表2 居住地ごとの進学先に選んだ理由(複数回答)

	町外 (n=107)	町内 (n=77)	合計 (n=184)
a 進路選択に有利	31 29%	20 26%	51
b 総合学科の学校	73 68%	30 39%	103
c 行事が魅力的	5 5%	1 1%	6
d 部活動が魅力的	4 4%	1 1%	5
e 通学に便利	16 15%	53 69%	69
f 人に勧められた	13 12%	5 6%	18

② 科目選択の判断や総合学科の魅力は満足・不満足に影響するか

満足に関する因子分析(主因子法、プロマックス回転)の結果、2因子が妥当と判断した。(表3)

第1因子に負荷量が高かった3項目は「進路の選択と指導に対する満足度」と命名した( $\alpha = 0.796$ )。第2因子に負荷量が高かった3項目は「地域を生かした多様な科目選択の満足度」と命名した。(  $\alpha = 0.733$ )

表3 因子負荷量(満足に関して)パターン行列

	因子1	因子2
h 進路支援充実	0.888	-0.054
g 教員が親身	0.812	-0.081
a 進路考える時間	0.604	0.103
c 選択科目充実	-0.161	0.874
b 主体的な選択	0.263	0.545
d 地域との関り	0.196	0.506
e 人間関係得られる	0.349	0.265
f 施設・設備充実	0.361	0.167

「進路の選択と指導に対する満足度」得点および「地域を生かした多様な科目選択の満足度」得点を算出した。満足を目的変数、科目選択の判断材料および在学中に感じた総合学科の魅力の各項目を説明変数とした重回帰分析を行った。科目選択時に「先生のアドバイス」「進路上の必要性」「先輩からの情報」を判断材料

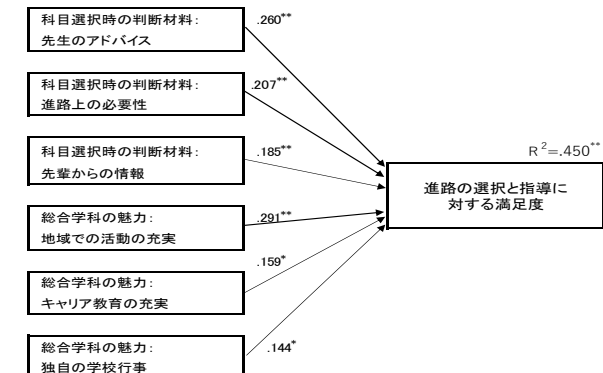


図7 「進路の選択と指導に対する満足度」に影響を与える要素

としていたほど、また、総合学科の魅力として「地域の活動の充実」「キャリア教育の充実」「独自の学校行事」を魅力として感じていたほど、進路の選択と指導に対する満足度が高かった。(図7) 地域を生かした多様な科目選択の満足度は、「先輩からの情報」を判断材料としていたほど、また「地域の活動の充実」「自分だけの時間割作成」「独自の学校行事」を魅力として感じていたほど高かった(図8)。満足度に関しては2つとも、地域での活動の充実が一番影響していることが示された。文部科学省(1993)は総合学科設立の意義にもあるように、地域素材を活用し、地域との連携をより進めていくためには、授業を活用した日常的で継続した取組が必要だ。そのためにも自治体や地域住民を軸とした教科横断的で魅力ある学校設定科目を考案し、キャリア教育と連動させていく必要がある。

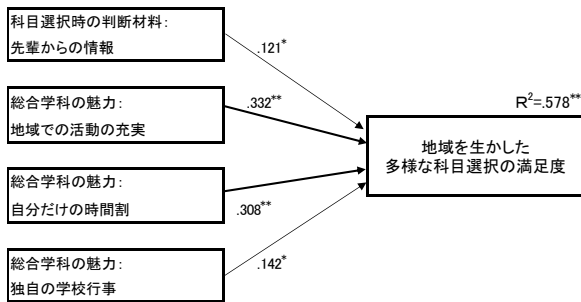


図8 「地域を生かした多様な科目選択の満足度」に影響を与える要素

また、不満に関する因子分析(プロマックス回転)の結果、2因子が妥当と判断した。(表4)

第1因子に負荷量の高かった2項目は「授業科目に関する不満」と命名した( $\alpha = 0.651$ )。第2因子に負荷量が高かった2項目は「人間関係形成の未熟さによる不満」と命名した( $\alpha = 0.631$ )。項目の合計により、「授業科目に関する不満」得点および「人間関係形成の未熟さによる不満」得点を算出した。不満を目的変数、科目選択の判断材料および在学中に感じた総合学科の魅力の各項目を説明変数とした重回帰分析を行った。

科目選択時に「自己の進路に必要なか」を判断材料としていないほど、授業科目に関する不満

表4 因子負荷量(不満に関して)パターン行列

	因子1	因子2
b授業興味持てない	0.815	-0.179
c科目不十分・不自由	0.639	0.098
e人間関係できない	-0.163	0.845
g 教員親身でない	0.237	0.508
a考える時間不十分	0.494	0.210
d地域と関われない	0.269	0.441
f施設不十分	0.343	0.167

足が有意であった。また、科目選択時に「自分の興味関心」を判断材料にしていないほど、また、総合学科の魅力として「自分だけの時間割」に魅力を感じていないほど、授業科目に関する不満が有意傾向であった。(図9)

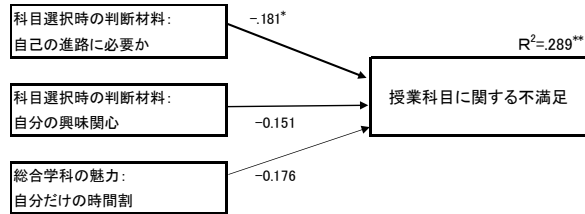


図9 「授業科目に関する不満」に影響を与える要素

「人間関係形成の未熟さによる不満」については、科目選択時に「自己の進路に必要なか」を十分に考えないほど、「先生のアドバイス」を十分に受けられたと感じないほど、「自分の興味関心」についてしっかり考えないほど不満が高かった。特に先生のアドバイスを十分に受けられたと感じられなければ不満につながるが有意であると示された(図10)。

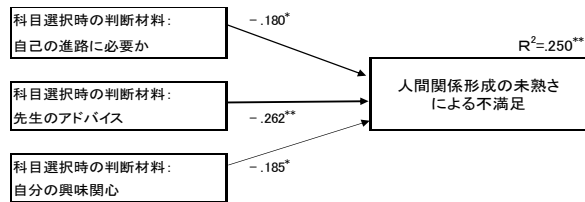


図10 「人間関係形成の未熟さによる不満」に影響を与える要素

不満の2項目については、いずれも自分の興味関心がはっきりしていれば不満にはつながらないことが明らかにされた。中央教育審議会(1991)には、親や先生に説得されて高等学校に入学したり、中学校段階で偏差値に強く依存した進路指導が行われたりしている点が、高等学校の不本意入学を生み中途退学者を出す要因となることを指摘している。総合学科高校がもっと中学校への情報を発信して総合学科への理解を高めるとともに、義務教育段階での総合学科高校への興味関心を引き出すような進路指導の在り方を示唆する内容であるとも考えられる。では、学習者はどのようなことに興味関心を持つのか、在校生アンケートによる分析から考察する。

#### 4 研究2(在校生アンケート)

##### (1) 目的

在校生アンケートの分析により総合学科の課題を明らかにし、今後のカリキュラム改善の

指標とする。さらに、卒業生アンケートと照合し、今後の対策を検証する。

(2) 方法

① 調査対象および手続き

対象校に在籍する3年次生110名にアンケートを実施した。対象者の内訳は表5のとおりである。

表5 対象者の内訳

	町内	町外	計
男	27	13	40
女	22	46	68
小計	49	59	108

※居住地未回答2名

実施時期は平成30年10月で、アンケートを持参し、調査終了後に回収した。

② 調査内容

アンケート項目は、卒業生アンケートに準じて作成した。

- a. 対象者属性 性別、居住地(学校のある市内(町内)か市外(町外)、選択している系列名
- b. 在籍校を進学先として選んだ理由 図11に示した6項目について、複数選択で回答を求めた。

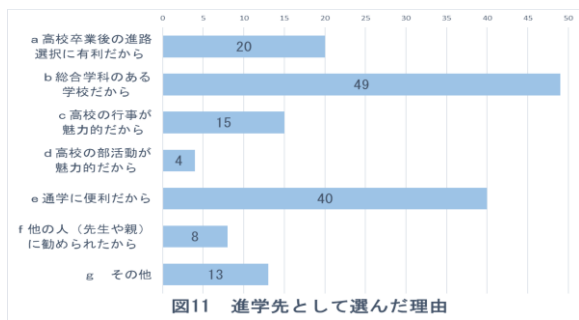


図11 進学先として選んだ理由

- c. 入学後の全体的満足度 満足(4点)、やや満足(3点)、やや不満(2点)、不満(1点)の4件法で回答を求めた。(以下点数は同じ)

- d. 項目別満足度 図12に示した8項目それぞれについて4件法で回答を求めた。また、項目以外の満足・不満足な点について自由記述欄を

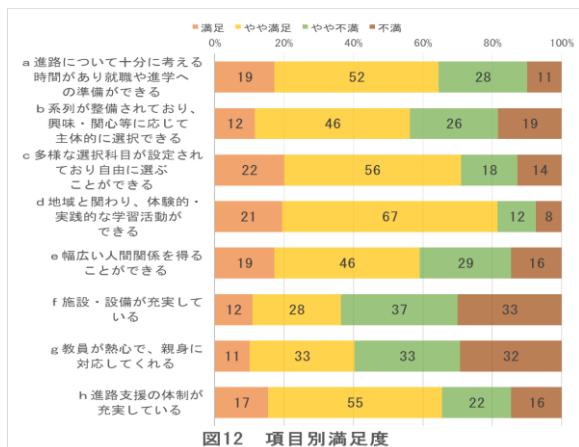


図12 項目別満足度

設けた。

- e. 科目・系列選択時の判断材料 図13に示した6項目について4件法で回答を求めた。

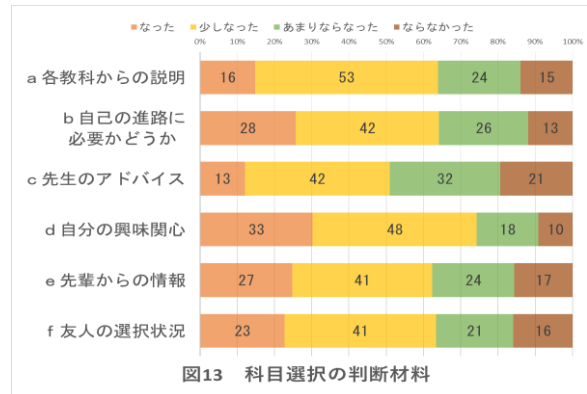


図13 科目選択の判断材料

- f. 地域と連携した授業や行事で最も印象に残ったもの 自由記述で回答を求めた。

- g. 総合学科における学びの意義 図14に示した5項目について、そう思う(4点)、まあそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)、わからないの5件法で回答を求めた。

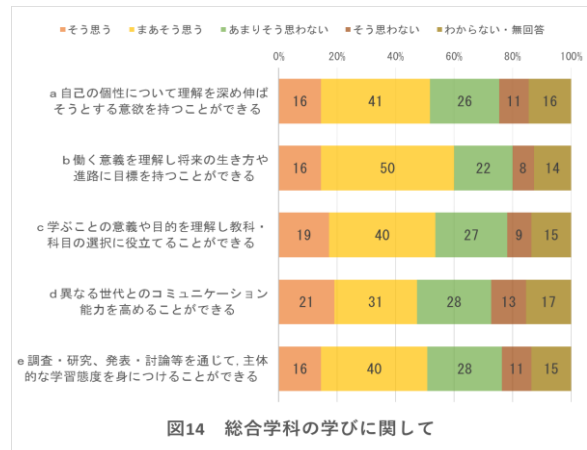


図14 総合学科の学びに関して

- h. 進路決定時の参照内容 図15に示した6項目について4件法で回答を求めた。

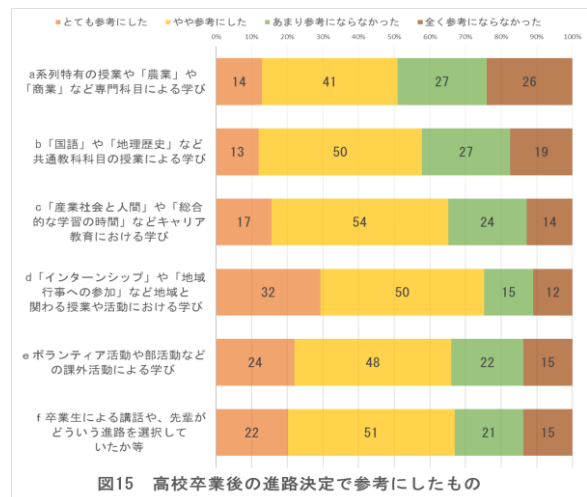


図15 高校卒業後の進路決定で参考にしたもの

### (3) 結果と考察 2

図16に示すとおり在校生の満足度は、「やや満足」を含めても32%と低い。満足に関する因子分析の結果、2因子が妥当と判断された(表6)。

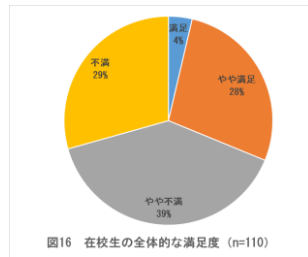


表6 因子負荷量 (在校生の満足)  
パターン行列

	因子1	因子2
h進路支援体制	0.887	0.011
g教員熱心	0.871	-0.058
f施設設備	0.683	0.089
d地域と関わり	0.013	0.848
c多様な選択科目	-0.016	0.788
b系列整備	0.050	0.637
a考える時間	0.414	0.366
e人間関係	0.397	0.382

第1因子に負荷量が高かった3項目は「生徒を取り巻く環境に関する満足度」と命名した。第2因子に負荷量が高かった3項目は「授業内容と選択に関する満足度」と命名した。項目の合計により、「生徒を取り巻く環境に関する満足度」得点および「授業内容と選択に関する満足度」得点を算出した。満足を目的変数、科目選択の判断材料および総合学科の学びに関する各項目を説明変数とした重回帰分析を行った。

科目選択時に「先生のアドバイス」を判断材料としていたほど、また、総合学科における学びとして「自己の個性について理解を深め、伸ばそうとする意欲を持つことができる」ほど生徒を取り巻く環境に関する満足度が高かった。一方科目選択時の判断材料として、「自分の興味関心」を判断材料としないほどその満足度が高かった。(図17)

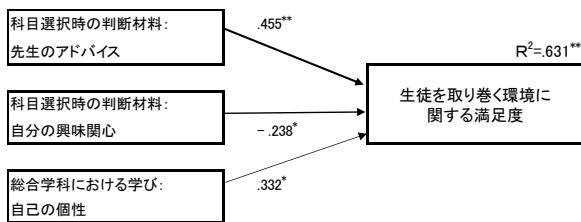


図17 「生徒を取り巻く環境に関する満足度」に影響を与える要素

「先生のアドバイス」を判断材料とし、「自分の興味関心」は判断材料としないことから、依存度の高い生徒ほど生徒を取り巻く環境に関する満足度が高くなるのではないだろうか。溝上(2018)は、「生徒が受け身になる、依存的になるように仕向けてきたのは学校であり教師である。～(中略)～はじめは手取り足取りの教育や指導・支援であっても、それを徐々に緩めていき、生徒がより自律的に取り組めるよ

うに手放していく。そのような教育方法を開発し実践していけばいいだけの事ではないのか。それは可能であり、挑戦していくしかないと思うのである。」と述べている。

総合学科における学びとして「学ぶことの意義や目的を理解し、教科・科目の選択に役立てることができる」ほど授業内容と選択に関する満足度が高かった。科目選択時の判断材料として「自己の個性について理解を深め、伸ばそうとする意欲を持つことができる」ことと、授業内容と選択に関する満足度に有意傾向が示された。(図18)

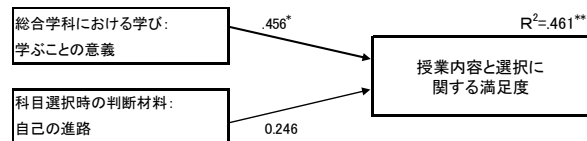


図18 「授業内容と選択に関する満足度」に影響を与える要素

なお、紙面の制約上掲載できないが、卒業生や在校生アンケートの自由記述に共通して見られるのが、「1年生の時に2・3年の授業が決まってしまう、変更ができない。」「進路が不確定の人もいるため、2・3年で後悔することがあった。」など、入学後の高校での学びで自分の進路目標が見つかって、その頃には科目変更できないという実態である。もっと詳細な実態を掴むため、卒業生によるインタビューで明らかにしたいと考えた。

## 5 研究3 (卒業生インタビュー)

### (1) 目的

アンケートから、選択の時期や選び直しの必要性が見えてきた。このように、アンケートから見えてきた学習者による評価を確認し、より具体的な対応策を見出す目的で行った。

### (2) 方法

#### ① 調査対象および手続き

平成29年3月に卒業した卒業生6名に来校してもらい、質問用紙を渡して回答を得た。調査時期は平成30年12月。回答した内容をもとに当時を振り返って話をしてもらった。

#### ② 調査内容

表7にあるようにa～gまでの7項目について、聞き取りを合わせて調査した。

### (3) 結果と考察 3

項目eについて、インタビューした全員が選

表 7 卒業生インタビュー 回答

a. 総合学科であることを入学前に意識して入学したか。

①はい	4
②いいえ	2

b. 卒業後、当時の授業が役に立っていると思う教科・科目名。(複数回答)

子どもの発達と保育	3
社会福祉基礎	2
数学Ⅱ	2
数学活用	1
数学Ⅰ	1

c. 今でも印象に残っている教科・科目名。(複数回答)

スズルⅡ	2
子どもの発達と保育	2
観光	2
簿記	1
フードデザイン	1
社会福祉基礎	1

d. 科目選択の判断材料としたもの。

将来に向けて選択した	2
将来の夢に役立つかどうか	1
大学受験に役立つもの	1
進路に関係するもの	1
進路に必要なもの	1

e. 選び直しができるとしたら、いつ、どんな風にしたいか。

○1年の時と、2・3年の時で行きたい学校が変わったので、大学に進学する上で必要になってくる科目を選び直したい。  
 ○情報の授業を選択しておけばよかった。  
 ○1年次と2年次の進路が違うため、選択科目を変更したかった。  
 ○看護系進学に役立つものを選択科目に入れたかった。  
 ○今現在、児童教育について学んでいるため、子供の発達と保育を学ぶ、知識を深めたい。  
 ○1年生の時に迷っていた授業がかぶってしまい、取りたい授業を取れるようにできなかった。  
 ○1年生の時に考えていた将来の夢を基準にして決めたら、2・3年次でその夢が変わった。教科の変更ができなかったため、変更できていたら現在の状況も変えられたかもしれない。

f. 地域とのつながりを感じた活動は何か。(複数回答)

ボランティア体験	5
部活動でのボランティア活動	2
観光の授業	2
インターンシップ	1
農業体験	1

g. キャリア教育の中でよかった活動や取り入れた方が良くと思うものは何か。

○選択科目を決定する時期を、2年次のものは1年次に、3年次のものは2年次に決定する時期を分けてほしい。  
 ○2年でインターンシップを別の場所で2回行うとよい。  
 ○授業選択の際のオリエンテーションを詳しくしてほしい。  
 ○大学についてもっと詳しく知る時間がほしい。

択科目に関する不満を持つことが明らかになった。具体的には、3つに大別できる。1つ目は「情報の授業を選択しておけばよかった。」とあるように、卒業して初めて必要性を理解したケース。2つ目は「授業がかぶってしまい、取れなかった」とあるように、開講授業の制約で取りたくても取れなかったケース。3つ目は「1年の時と2・3年の時で行きたい学校(進路)が変わった」とあるように、進路変更に伴う科目の変更が不可能になったケースである。特に3つ目は、科目変更が叶わなかったために、科目選択時の志望のまま進学したケースも見受けられた。中央教育審議会(1991)が狙いとしている「寄り道してゆっくり成長する者にはその自由を与える」の「自由」が現状では高校1年の6月までであり、「高校3年間の学びでじっくり成長する」とはいかない。ここを打開し、2年次、場合によっては3年次でも選択の変更が可能となるように制度設計する必要がある。

## 6 総合考察

以下の3点について考察した。1つ目は、結果と考察1により、地域での活動の充実が生徒

の満足度に関係していることが明らかになった。「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」を含め、地域を題材にした活動は生徒の満足度も高い。卒業生は地域での学びを実感し満足度との相関も見られる。在校生は満足度との相関ははっきりしないが、「地域と関わる学習活動」に満足しており、それが進路選択にも影響している。さらなる地域との関わりを実感できる授業の在り方が必要であると考えられ、対象校においてもその実践を試みており、地域をテーマにした教科横断型の授業を学校設定科目として創設するなどの検討を始めた。

2つ目は、不満足について、科目選択時に「自己の進路上の必要性」や「興味関心」による判断をしなかったほど高いが、高校1年生の6月に自己の進路が明確で、なおかつ、興味関心をはっきりした上で科目の選択を判断することは難しいため、選択する時期の見直しや在学中に複数回の「選び直し」の機会が必要であることである。先に述べたように、総合学科で学びを深めれば、知らない自分に気づき新たな発見をする可能性が高い。多くの選択科目の中で、すべてを自己の興味関心や将来就きたい職業に基づいて選ぶことも(しかも1年生の6月で)ハードルが高いことだろう。多くの卒業生が記述していたが、選択した科目の見直しができる機会が必要と考える。総合学科で学ぶ学習者にとって「科目の変更ができない」ことが不満の要因であることは明らかだ。また、対象校の卒業生アンケート「科目選択の判断材料」(図2)において、「自分の興味関心が科目選択の判断材料となった」卒業生が多数であったこと、「進路選択に影響を与えた理由」(図3)において「進路に必要な知識や技能を身につけることができたから」が多数であることから、自分の考えている進路を基に科目を選択していることが伺える。一方、「進路選択に影響を与えた教科」においては、開設当初系列として設定した4つのメイン教科「芸術」「農業」「福祉」「観光」のうち3つが、卒業生に評価されておらず、卒業後の進路に直結していない可能性が示唆された(図19)。何らかの形で間接的に関連があるものの、学習者にとっては「福祉の仕事に就きたいから福祉の授業」「工学部に進学したいから理科」というように、進路に直結す

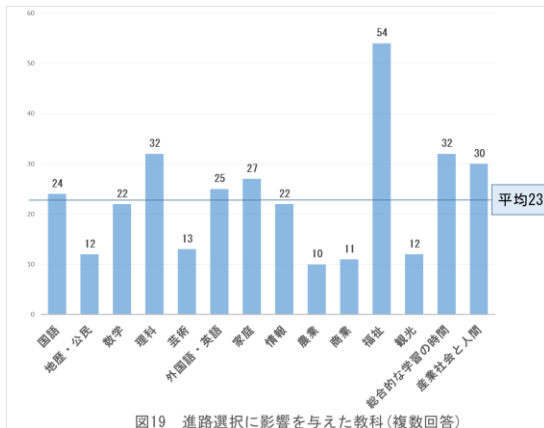


図19 進路選択に影響を与えた教科(複数回答)

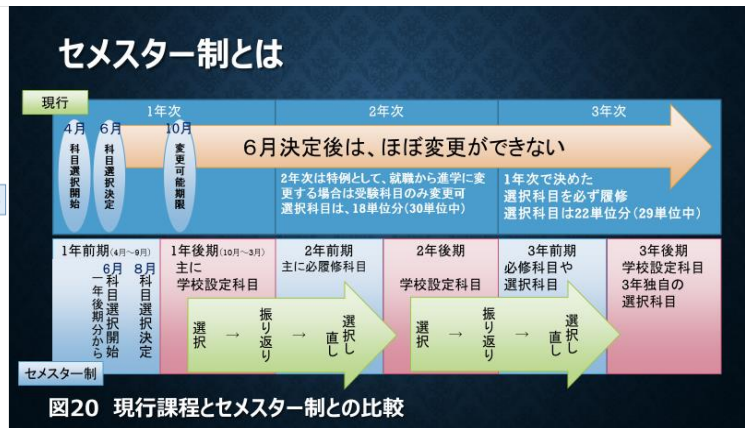


図20 現行課程とセメスター制との比較

るわかりやすさが必要不可欠と考えられる。

そこで、3つ目として、生徒の選び直しを保障するためにセメスター制の導入が必要であると考へた。セメスター制とは半期単位認定制度のことである。(図20) 総合学科でありセメスター制を行っている大阪府立S高等学校へ視察に行った。S高等学校では科目選択は前年5月に行い、さらにその年後期の選択科目も選び直しできるため、高校での学びを深めながら生徒自ら自己の在り方生き方を考えて科目選択することが可能だ。自己の興味関心を、じっくり時間をかけて引き出せるこのシステムは、主体的な学習を行う上で意義がある。

前期と後期の授業配置については、主に必修科目を中心とした授業科目を前期に、主に学校設定教科(科目)を後期に配置する。学校設定科目は原則教科書不要であるため、同年の前期で変更しても校内の処理だけで足りる。また、学校設定科目は地域を素材として学習するため教科の学びが身の回りの事象と結びつきやすく、教師が提示する「身につけさせたい資質能力」を生徒が実感しやすいと考えられる。

## 7 到達点と課題

本研究の到達点として次の2つがある。第1に、総合学科における学びは地域を素材としているほど生徒は主体的に学習し満足度も大きく、共通教科においてもグループ学習など他者と関わる学習形態であればさらに良い効果が期待できること。第2に、セメスター制による科目選択のし直しは、3年間のなかで生徒に振り返りの機会を与えて進路に必要な科目をしっかり選び、特に「ゆっくり成長したい者」には時間的余裕を与えてより良い選択が可能になることである。

残った課題としては、①1年次の選択が安易

なものになる可能性があること②本当にセメスター制の可能性はあるかどうかである。全国にあまり例のないセメスター制の実現に向けて可能な限り迫っていききたい。

## 8 謝辞

本研究を進めるにあたり、助成をいただきました公益財団法人やまがた教育振興財団に、深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 中央教育審議会(1991)『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について(答申)』,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/1309574.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309574.htm)(最終閲覧日2019年1月25日)
- 溝上慎一(2018)『学習とパーソナリティー「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよ!」をどう見るかー』, 東信堂。
- 文部科学省(1993)『高等学校教育の改革の推進に関する会議の第4次報告』,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19930322001/t19930322001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19930322001/t19930322001.html)(最終閲覧日2019年1月25日)
- 二井正浩(2009)『総合学科の動向に関する調査結果—平成11年と平成19年の調査結果を比較して—』, 国立教育政策研究所紀要, 第138集。
- 東京女子体育大学(2012)『文部科学省委託事業 総合学科の在り方に関する調査研究報告書』。

*Revitalization of High School "Integrated Course": Curriculum Reconsideration from Learner's Perspectives*  
Masato MATSUMURA